

【資料】

平和学プログラムの高度化を目指して

—— 北星学園大学平和学プログラムの誕生・現在, そして未来 ——

萱野智篤
片岡徹

資料

平和学プログラムの高度化を目指して

—— 北星学園大学平和学プログラムの誕生・現在、そして未来 ——

萱野 智 篤
片岡 徹

目次

はじめに—大学と平和学教育

- I. 北星学園大学における平和学教育の誕生
1991年総合講義L「国際協力と平和の学際的研究」
- II. 北星学園大学における平和学教育の展開
1997年「国際交流と平和」から2000年「平和学」へ
- III. 平和学教育の高度化を目指して
建学の精神の継承
リアリティーとのふれあい
平和のための国際教育協力

結びにかえて—大学と平和学教育再考

[解説]

本稿は、2009年度～2010年度の2年間にわたって行われた北星学園大学特定研究費（プロジェクト研究）「平和学プログラムの高度化に関する調査研究」（研究代表者 萱野、共同研究者 片岡）の成果の一部である。なお、この共同研究のもう一つの成果は、マンチェスター大学元平和学研究所所長、ケネス・ブラウン氏の講演「マンチェスター大学の平和学プログラムの歴史～過去、現在、そして未来～」の翻訳（片岡訳）として北星論集文学部第48巻第2号（2011年3月）に公開している。

はじめに—大学と平和学教育

第2次世界大戦後の米ソ対立の中で、発展し、脚光を浴びるようになった平和学は、日本においても、1973年に日本平和学会が設立され、諸大学に平和学講座が開設されてきた。1996年の段階では、28大学に広がり、「平和研究」という名称の講座は9大学に常設されていた¹。また、「平和」をテーマとするミュージアムを持つ大学（立命館大学）や、平和研究所を持ち独自の紀要を発行している大学（明治学院大学）があり、また、恵泉女学園大学では、日本で初めての平和学を主テーマとする大学院（修士）プログラムが設けられている。

本稿の目的はこの2年間にわたる共同研究の成果を総括するとともに、このような世界および日本における平和学教育の広がりを考慮しながら、北星学園大学における平和学教育の過去と現在を明らかにし、さらにその高度化を図るためのいくつかの具体的提言を行うことにある。

第1章と第2章では、北星学園大学で平和学教育が開始された経緯とその特長を明らかにする。第3章では、さらに、先駆的な国内外諸大学の平和学プログラムをいくつか取り上げ、その強みを作り出しているものが何かを考察したうえで、終章で、北星学園大学の

平和学プログラムをさらに高度化するための具体的な提言を行いたい。

I. 北星学園大学における平和学教育の誕生

1991年総合講義L「国際協力と平和の学際的研究」

北星学園大学における平和学教育は、1991年に、一般共通部門の総合講義L「国際協力と平和の学際的研究」によって開始された。この科目は通年4単位の科目で、全学年、全学部学生に開かれており、その科目名の示す通り、担当教授である深瀬忠一教授をはじめとする教員が所属学部や専門の垣根を越えて協力し、平和というテーマを学際的に追究するものであった。深瀬忠一教授は前任校の北海道大学で、すでに「平和の学際的研究」という科目を、北海道で初めての一般教養の平和学教育科目として開始しており、この科目の原型とも言えるだろう。

総合講義L「国際協力と平和の学際的研究」は、各専門分野・テーマの専門家が1～2回の講義を担当するいわゆるオムニバス形式の講義科目として展開された。

この総合講義L「国際協力と平和の学際的研究」の特長を、深瀬教授自身の言葉を引きながら検討してみると、そこには、独自の意義をもった「学際性」と「学生参加」という2つの大きな特徴が指摘できる。

「学際性」の意味するもの

原型となった科目そして北星学園大学において総合講義として展開された科目においても、「学際的研究」という言葉が入っていることに注目したい。ここにおける「学際性」とは、ただ単に平和という統一テーマのもとで、毎回多様な講師が異なる分野の専門知識を教授すること以上の意味を有している。

ここでいう「学際性」の意義について、当

時の担当者の深瀬教授が残した文章を引用してもう少し詳しく検討してみよう。

この総合講義は、学生たちが関心を持つ大テーマであると同時に、教授ら研究者が、各専門的研究の枠ないし領域のなかにとじこもる狭隘さないし壁を打破して、国際協力と平和という共通の(人類、地球、世界といった普遍的)大問題との関連において、自己の専門領域の視野をひろげ、自らを位置付け、その意義と役割と協力関係を総合的に再検討し、自己の専門領域自体の新たな開拓ないし限界の突破を一学際的に一考える必要性を意識ないし痛感していた。

それは、学問の良心ないし意欲の内発的要請(求)であるとともに、人間ないし市民としての道徳的元気(あるいは、直面する現実の欠陥・不安・不満にうちかとうという意欲)によることがうかがわれた。この総合講義に協力する責任を担当することによって、はじめて関連する多様な課題を総合的に整理し、考究し、自らの専門領域の掘り下げの機会もえた、と漏らされた教授たちが少なくなかった²⁾。(下線は筆者)

この文章から明らかなのは、ここで「学際的研究」の意味するものは単に、「平和」を共通テーマとして、各講師が専門分野の関連知識を教授するだけでなく、個々の講師が「国際協力と平和」という大問題との関連において、各専門領域の限界へと挑戦し、人間ないし市民としての「道徳的元気」(モラル)によって講義を展開することを意味しているのである。

「学際性」を意味する interdisciplinary という言葉が、専門学術分野間の横断性を意味するのに対し、ここに言う「学際性」とは、むしろ intra-disciplinary, すなわち、講師個々人の内面における専門領域の打破、を求め、一人の市民として自己の専門領域の拡大

を求めるものだった。

このような、講師自身の内面の「学際性」を得て展開された講義は、各回が密度の濃い、また熱意のこもったものとなり、多くの学生を引き付けた。(なお、本稿の執筆者の一人である片岡は、北星学園大学文学部英文学科在学中に、この科目を履修し、その後、後述するBCA交換留学生としてマンチェスター大学で平和学を学んだ)

「学生参加」の意味するもの

オムニバス形式の講義において、しばしば陥るのは、一講師による講義が1回ないし2回に限られるため、講師と学生とのコミュニケーションの機会が限られてしまうことである。だが、総合講義Ⅰ「国際協力と平和の学際的研究」においては、個々の講師の研究とそれを聴き考える学生との間のコミュニケーションについて特別の配慮が払われた。再び、深瀬教授の文章から引用しよう。

…ついで、研究が先導的基盤としてしっかり永続し、その軌道の上に教育が不可分の前進発展することである。恒常的で優れた研究の基礎なくして、教育は浮動し精彩を欠く。あるいは、人気取りに終わり長続きしない。また、若々しい学生の反応・協力ある教育なくして、高踏的研究は時代の真のニーズや現実から遊離し、すぐしぼんでしまうであろう。したがって、国際協力、平和研究といった開拓的領域では、すぐれた専門研究者(教員)が、共通の研究課題に向かって指導力を発揮する責任があるが、絶えず、学生との協力ないし開かれた態度と、教育による相互交感と共学・前進を要する(口頭・書面・質疑・討論)。「平和教育」における「平和研究」の重要性が強調されねばならない(とくに大学において)とともに、学生にも、先端的「学際的研究」に参加させる講義が必要であろう。(下線

は筆者)

個々の講義における、学生からの質疑討論は、特に国際協力、平和研究といった開拓的領域でその重要性が強調された。学生の新鮮な関心や疑問によって、教育活動を活性化し、さらに、学生にも「学際的研究」に参加する機会を与えることで、教員と学生が一体となって、国際協力と平和という開拓的領域に踏み出すことが期待されていたのである。

Ⅱ. 北星学園大学における平和学教育の展開

1997年「国際交流と平和」から2000年「平和学」へ

1997年総合講義Ⅰ「国際協力と平和の学際的研究」は、カリキュラム改編に伴い、「国際交流と平和」と名称を新たにし、深瀬教授の退職に伴って、担当者が前年に赴任した萱野に代わった。通年4単位のオムニバス形式という展開も変わらず、学内外から多くの講師の協力を得て、展開された。学外からは、太田一男(酪農学園大学)、李景珉(札幌大学)そして、交流教授として本学滞在中のロバート・ケラー教授(マンチェスター大学)等の参加も得た。

また、2000年には、再びカリキュラム改編が行われ、この当時、他大学でも多く開かれるに至っていた「平和学」をそのまま科目名として、半期2単位として展開を続けた。

深瀬教授が、総合講義Ⅰ「国際協力と平和の学際的研究」で重視した「学際性」と「学生参加」の特長は、その後継科目であるこれらの科目においても引き継がれ、オリエンテーションの後、グループを形成して4～6週間の準備期間において、統一テーマについて様々な視点からの討論を学生主体で展開するパネルディスカッションが行われた。

また、平和を学ぼうえで、現実の世界で生

起する諸問題に直接触れ、自らの関わりや態度を深く考えるための機会も様々な形で設けられ、2004年には、この年の4月に起こったイラク人質事件の当事者、高遠菜穂子氏にもお話しいただき、学生たちと親しく交わる機会を得た。

2007年カリキュラム改革における平和学関連科目の拡大

2007年度の共通部門における総合的カリキュラム改革において、平和学関連科目は、「平和学(A)」「平和学(B)」「平和学演習(A)」「平和学演習(B)」「平和学演習(C)」と5科目に増える。このうち、「平和学(A)」は、従来からのオムニバス形式の講義、「平和学(B)」は当時国連大学の主催で開講されていた夏季集中北海道サマーセッションへの参加による単位認定科目であった。平和学演習は、カリキュラム改革の中で、講義と演習の接続の試みとして設けられた。すなわち、オムニバス形式の平和学(A)を受講した学生の中で、より深くそのテーマを掘り下げて研究したい学生が、専門の講師の開講する演習に参加して学習を深めることがその狙いだった。越田清和(沖縄・少数民族問題)、片野淳彦(紛争転換)、片岡徹(平和教育・2010年度より開講)の3つの演習が設けられた。

2007年度からこのようにして、平和学関連科目は一挙に6科目に拡大する。

平和学(A)は、前期にその年度に設定したテーマに応じて学際的な分野の専門講師が1回ないし2回の講義を担当して講義を展開し、学生がグループに分かれて行うグループディスカッションを行っている、いわゆるオムニバス形式講義+学生参加型の講義である。その年度により差はあるが80名から120名の履修登録があった。

平和学(B)は国連大学が主催する北海道サマーセッションへの参加をもって単位認定を行ってきたが、現在主催者がこの行事を中

止しており、休眠状態にある。

平和学演習(A)、(B)、(C)は、専任1名、非常勤2名と非常勤への依存率が高いが毎年各演習を希望する学生が6名~20名おり、中には終了後さらに平和学を大学院で深めることを目指す学生も出てきた。

何度かのカリキュラムの変遷を経ても、学際性と学生参加の重視という2つの特長は、ここ20年間の北星における平和学の中で重視されてきたし、これからも生かしてゆくべき貴重な遺産といえるだろう。

また、2010年度には、第36回の大学公開講座が、共通部門の担当となり、「市民のための平和学一草の根から創る平和」と題して、これまでの講義、演習で積み重ねられた成果を一般市民向けに5人の講師が担当して講義を行い60名を超える一般市民の参加を得た。参加者からは、「生涯テーマとして考えていく基盤ができた」等の好評を得た。

平和学を学ぶ学生とその環境の変動

大学の講義は、それを必修化でもしない限り受講者数は毎年変動するのが常である。そして、平和学は言うまでもなく、いかなる公的な資格とも何の対応も持たないため、世界の動きと平和に対する学生自身の関心に大きく依存する。

北星の平和学の履修者数も、その名前を平和学と名乗るようになってからだけでもかなりの変動がある。履修登録者は最低で30名から、124名まで、ここ5年間の平均をみると履修登録者は65.4名、となっている。変動の要因には、まず2つの要因が考えられよう。第1には時間割上の配置である。朝1講目となった場合は人数が少なくなり、また学部専門必修科目や人気科目と同じ時間帯となった場合も人数は減る。

しかし、このような減少要因だけでなく、ここ数年の動きをみると、それに対する増加要因といったものも考えられる。それは、学

生たちが持つ、戦争・改憲への危機意識や格差社会の深まりによる不安ではないだろうか。ちなみに、履修者数が100人を超えたのは、2003年で115名、この年はイラク戦争の開始、そして自衛隊の派遣という動きがあった。また81名だった2007年には、安部政権下で憲法改正のための国民投票法案が推進されていた。

グローバル化に伴う格差の拡大が身近で感じられるようになった2010年には、履修者数は最高の124名となった。

こうして見ると、自衛隊や憲法9条をめぐる、自分たちに直結する現実政治における変化が予感・実感されるとき、あるいは身近にホームレスの人々が現れて経済のグローバル化に伴う格差の拡大を実感するときに、日常生活の平和への関心が高まり、履修者も増え、学生の参加レベルも高まる傾向が見られる。言ってみれば、戦時への予感、あるいは平和な日常が身近で失われつつあることへの不安、とても呼ぶべき現実の状況が、学生を平和学の学習に向かわせているのではないだろうか。

現在、平和学を履修している学生たちは、戦争を直接経験してはいないが、1991年の湾岸戦争後に生まれ、その後の2001年の同時多発テロ、それに引き続いて「反テロ戦争」の名のもとに行われている、イラク、アフガニスタンの戦争の同時代に生きている。2008年のリーマンショックに始まる世界的な不況は彼らが進路を考え始める高校時代に起きている。こうして考えると、物心が付いてからの彼らの生きてきた世界には、平時よりは戦時、そしていつ平和な日常生活が失われるかもしれないという不安が常態化してしまっている。

2011年度の平和学(A)は「グローバル化と平和」をテーマとして次のような講義のねらいをもって、展開した。

グローバル化と平和

日本の食糧自給率(カロリーベース)は

約40%、この数字が示すのは、日本に住む私たちの身体・精神活動の基盤となるエネルギーの60%を、私たちは海外の生産地の土地や水に依存している事実です。モノ・カネ・ヒトが国境を越えて激しく移動するグローバル化の進展の中で、私たちはその恩恵をこのようにして享受しています。

しかしながら、他方では、このグローバル化の進展とともに、世界で最も豊かな国々と、もっとも貧しい国々の格差はますます広がり、また国を問わず国内における格差も拡大の傾向にあります。では、グローバル化が、世界の将来にもたらすのは、はたして平和な世界でしょうか、それとも紛争が激化する世界なのでしょうか？

本講義では、政治・経済・法律・教育・文化・異文化コミュニケーション等それぞれの分野から専門の講師が、グローバル化が進む世界における平和をめぐる問題に取り組み、講義を展開します。後半に予定しているパネルディスカッションでは、グローバル化と平和をめぐる具体的な問題を取り上げ講義参加者がグループに分かれて調査・発表・討論します。これらの講義とパネルディスカッションを通じて、グローバル化する世界に生きる一人の市民として、平和を実現する心の筋肉と脳力を鍛えましょう。

講義の展開は次のスケジュールに沿って、11名の講師による講義とパネルディスカッションが行われた。

- 第1回 イントロダクション(萱野智篤)
- 第2回 平和学のバイオニア～米国マンチェスター大学(片岡 徹)
- 第3回 紛争転換とは何か(片野淳彦)
- 第4回 宗教と平和(古賀清敬)
- 第5回 憲法学の視点から(岩本一郎)
- 第6回 教育学の視点から(片岡 徹)
- 第7回 経済学の視点から(勝村 務)
- 第8回 パネルディスカッション

オリエンテーション

- 第9回 フェアトレードで学ぶ世界, 作る世界 (萱野智篤)
- 第10回 異文化コミュニケーションの視点から (長谷川典子)
- 第11回 民衆文化の視点から (阿部敏夫)
- 第12回 国際法の視点から (齊藤正彰)
- 第13回 ヨーロッパから考える (原島正衛)
- 第14回 ローカルとグローバルを結ぶ平和学 (越田清和)
- 第15回 パネルディスカッション

今年度2011年度の履修者数は99名だったが、開講直前に地震・津波・そして原発災害が同時に発生するという、人類がこれまで経験したことのない複合災害としての東日本大震災が発生した。これまでに経験したことのない形で、身近な日常で平和が突然大規模に失われる状況が生まれ学生の平和に対する意識は非常に高まった。

パネルディスカッションでは、「今、ここから始まる平和～東日本大震災後の世界を構想する」をテーマとして、核と人間、地域と防災、再生可能エネルギーの可能性等の具体的テーマについて学生たちがグループに分かれて、調査発表、討論を繰り返して、きわめて充実したものとなった。

今こそ、「戦争の諸原因と平和の諸条件に関する研究」(1964年国際平和研究学会)としての平和学の大学教育における高度化の必要はこれまで以上に高まっている。

Ⅲ. 平和学教育の高度化を目指して

建学の精神の継承

大学における平和学教育をさらに高度化し、教育の質と内容を次なる段階へ進めるために必要なものは、何だろうか。

我々はそれを、大学そのものを生み出し、その大学の特長を作り、そしてその日々の教育を支える精神的支柱となっている「建学の

精神」(北星学園大学におけるミッションステートメント)だと考える。

建学の精神が、大学の平和学教育に継承されている具体的な例を、アメリカで戦後初めて総合的な平和学教育プログラムを作り上げたマンチェスター大学と、日本で唯一大学院で平和学研究プログラムを持つ恵泉女学園大学そして、世界で唯一の平和ミュージアムを持つ立命館大学に見てゆきたい。

[マンチェスター大学]

本学の姉妹校の一つであるマンチェスター大学は、1948年に平和学のプログラムを設立したことで知られ、米国のみならず世界の平和学プログラムのモデルとなったと言われている³。

その平和学プログラムの歴史的な背景については、マンチェスター大学名誉教授であり、元平和学研究所所長であった故ケネス・ブラウン教授の講演録に詳しいが⁴、現在もいわば世界の平和学の拠り所として注目を集め続けている。

なお現在の所長は故ケン・ブラウン先生の娘であるケイティ・ブラウン先生が務めている。生前ケネス・ブラウン教授は、「Students are our hope (学生が私たちの希望である)」と頻りに口にされ、この平和学プログラムでは学生との対話や議論をとっても重視している。そこでは、単に講義にとどまらず、いわば人格的な触れ合いを通して平和への問題を文字通り「共に考えていく」ことがなされている。その良き伝統は現在も脈々と引き継がれており、このことは単に平和学を考えるだけではなく、大学という存在を考える上でとても大切なことを教えている。

[恵泉女学園大学]

北星学園の創立者であるサラ・C・スミスの直接の薫陶を受けた河合道は、1929年女子教育機関として恵泉女学園を東京世田谷に設

立した。戦後短大、そして大学に発展した現在の恵泉女学園大学は、日本で平和学教育を展開している大学の中でも、唯一の「平和学研究科平和学専攻」を擁している。恵泉女学園大学において、「平和学」の教育と研究がこれだけ重視されている背景には、学園創立当初から「聖書」「国際」「園芸」を正課に取り入れ、その教育の柱として、

- 1、自己を尊重し、人種や階級に関わりなく他人を尊重すること。
- 2、日本女性が世界を知り、偏見をなくし、それに対峙すること。
- 3、自然をいつくしみ、生命を尊び、人間の基本的なあり方を学ぶこと。

を打ち立てたことに由来する。

1988年、初代学長の村井資長は、創立者河合道の遺志を受け継ぎ、大学としての理念を次の3つに集約した。

1. 「考える大学」

学問の出発は、考えること、疑問を持つこと、批判することにあるとして、真剣に自分で考え活発に討論し合う、考える大学でありたい。

2. 「平和を目指す女性の大学」

平和と共存を担うものとして、社会で活躍する女性を育てる大学でありたい。

3. 「地球の大学」

地球規模でのものを考え、欧米やアジアに焦点を合わせた文化・語学を学べる大学でありたい。

恵泉女学園大学の建学の理念は、これらを集約して「平和を目指す女性の大学」～正しい生き方、美しい生き方のために～と表現されている。

そしてこの創立当初から脈々と受け継がれ

てきた理念は、実際のカリキュラムにおいても、「キリスト教学入門」「生活園芸入門」と並んで「平和研究入門」が、全新入生が学ぶ必修科目の一つとして位置づけられ、8クラスが4人の講師によって展開されている。

平和学研究科もまた、これらの土台の上に乗って、フィールドスタディを含めた多彩な科目が展開されている。⁵

[立命館大学]

京都市にある立命館大学は、世界で唯一の大学が平和博物館を有している機関として知られている。その創設の理念は次のようなものである。

人類は20世紀において、2度におよぶ世界大戦を経験し、幾千万もの命を失いました。しかし、地域紛争は今なお絶えることなく、多くの人びとが生存の危機にさらされています。また飢えや貧困、人権抑圧や環境破壊など人類が共同して解決すべき問題も、多様な形で浮上してきています。わたしたちは、紛争の原因を取りのぞき、人間の可能性が豊かに花開く平和な社会の実現に向けて努力することが求められています。立命館大学国際平和ミュージアムは、平和創造の面において大学が果たすべき社会的責任を自覚し、平和創造の主体者をはぐくむために設立されました。(下線部は著者による)

また立命館大学国際平和ミュージアムは、単に平和博物館を有しているだけではなく、学園内においては教学機関として教育を考えるいわば磁場のような役割を果たしてもいる。

学校法人立命館には小学校から高等学校までであるが、各校には平和教育専門委員を配置し、定期的に平和教育に関するカリキュラム検討会や、各校の取り組みを交流し、そして時期を設定してその取り組みを国際平和ミュー

ジウム内で展示するという企画を立てている。

また、学校法人立命館は、下記のような立命館憲章を2006年に策定している。

「立命館憲章」

立命館は、西園寺公望を学祖とし、1900年、中川小十郎によって京都法政学校として創設された。「立命」の名は、『孟子』の「尽心章句」に由来し、立命館は「学問を通じて、自らの人生を切り拓く修養の場」を意味する。

立命館は、建学の精神を「自由と清新」とし、第2次世界大戦後、戦争の痛苦の体験を踏まえて、教学理念を「平和と民主主義」とした。

立命館は、時代と社会に真摯に向き合い、自主性を貫き、幾多の困難を乗り越えながら、広く内外の協力と支援を得て私立総合学園への道を歩んできた。

立命館は、アジア太平洋地域に位置する日本の学園として、歴史を誠実に見つめ、国際相互理解を通じた多文化共生の学園を確立する。

立命館は、教育・研究および文化・スポーツ活動を通じて信頼と連帯を育み、地域に根ざし、国際社会に開かれた学園づくりを進める。

立命館は、学園運営にあたって、私立の学園であることの特性を活かし、自主、民主、公正、公開、非暴力の原則を貫き、教職員と学生の参加、校友と父母の協力のもとに、社会連携を強め、学園の発展に努める。

立命館は、人類の未来を切り拓くために、学問研究の自由に基づき普遍的な価値の創造と人類の諸課題の解明に邁進する。その教育にあたっては、建学の精神と教学理念に基づき、「未来を信じ、未来に生きる」の精神をもって、確かな学力の上に、豊かな個性を花開かせ、正義と倫理をもった地

球市民として活躍できる人間の育成に努める。

立命館は、この憲章の本旨を踏まえ、教育・研究機関として世界と日本の平和的・民主的・持続的発展に貢献する。

立命館大学では国際関係学部の君島東彦教授（憲法学・平和学）を中心に、「平和学」の授業が展開されているが、大学の講義がこのような平和博物館と連携するときの教育的効果は計り知れない。立命館大学国際平和ミュージアムの展示物は単に「過去」の展示物のみならず、「現在」や「未来」に焦点を当てた展示物もあり、まさに平和の問題を現在進行形の問題として考える機会が豊富に取り揃えられている点も特長と言えよう。

では、北星学園大学においてその建学の精神の中で、平和学教育を積極的に進めてゆく教学理念は、どこに見出されるのだろうか。我々は、それを、2003年に、建学の精神を具体化し、北星学園大学が果たすべき社会的使命を宣言するものとして制定された北星学園大学ミッションステートメントの中に見てみたい。以下ミッションステートメント全文を引用する。

北星学園大学ミッションステートメント

北星学園は、その歴史が一世紀を越えてなお創立者サラ・C・スミスの愛と知と技に基づく教育の志を継承しつつ今日に至っています。北星学園大学は、その時代を越えて継承されてきた想いを、今後も教職員・学生の連携に基づき、そこに携わったすべての者において継承し続けるために、この使命を宣言します。

1. 私たち北星学園大学に集う者は、正義と良心に従い、自由に真理を探求し、真理によって自由を得ることを目指し

ます。

2. 私たちは、移りゆく時代の中で、地域・社会・世界の諸情勢に絶えず目を向け、その中における北星学園大学の存在意義を確認し、本学の果たしていく役割を考え、実践することを目指します。
3. 私たちは、世と時代が作り出した、悲惨な出来事に対して、平和と尊厳を作り出していくために、北星学園大学が果たしていく役割を考え、実践することを目指します。(下線筆者)
4. 私たちは、北星学園大学における教育・学習・研究から知と技を生み出すとともに、それらが社会において成果を発揮し、社会において貢献できる存在となることを目指します。
5. 私たちは、このような志の下に契約に基づいて集い、そこから愛の献身と批判的精神において、自由な交わりと活動が営まれる北星学園大学であることを目指します。

『求めよ、そうすれば、与えられるであろう』(マタイによる福音書7章7節)

以上のミッションステートメントの中でも特に「3. 私たちは、世と時代が作り出した、悲惨な出来事に対して、平和と尊厳を作り出していくために、北星学園大学が果たしていく役割を考え、実践することを目指します。」は、北星学園大学における今後の平和学教育に、揺るがざる基盤を与え、さらなる高みを目指す方向を指し示している。

リアリティーとのふれあい

北星学園大学は、すでにその建学の精神とその社会的使命の宣言であるミッションステートメントにおいて、「平和と尊厳」を作り出すことを鮮明にしている。では、その前段に

ある、「世と時代が作り出した、悲惨な出来事」と、学生たちはどのような触れ合いを持つのだろうか。

北星学園大学では、各学部・学科を通じて、福祉や教育、そして国際協力の現場を知り、触れるための様々な実習科目が展開されている。

その範囲は、道内に限らず、国内外、現場の性質を見ても、コミュニケーション、福祉、教育、海外協力 NGO の現場など様々な地域に及んでいる。東日本大震災後には、いくつかのゼミが現場を訪れ、地元の人々の話を聞き、物語を記録するという貴重な体験を得た。

こうやって各学部・学科で行われている現地実習・フィールド実習は、学生たちに現実の世界でリアリティーと触れ合う貴重な機会を提供している。

また、学園レベルにおいても、1996年から2000年にかけて、韓国、沖縄への平和の旅等の企画が実行され、大学及び短期大学部の学生も、中・高校生とともに参加した。

それらの成果と学園内各校での取り組みが『時のしるし』(第一号-第五号)として記録されている。

平和のための国際教育協力

北星学園大学は、マンチェスター大学も所属するBCA (Brethren Colleges Abroad) に加盟するアメリカ合衆国の12大学、その他にもカナダ、イギリス、そして近隣の東アジアでは、中国、韓国、台湾の諸大学と留学生の交換を含めた様々な教育交流を展開している。

中でもアメリカのBCA との交流は、平和教育の経験交流を進め、学生を通じた交流を図る上で重要である。絶対平和主義教会の流れを汲むこのプレズレン派の大学には、例えば前述したBCA 姉妹校としてジュニアータ大学などがある。また、同様の立場を採るメ

ノナイト派の大学としては、イースタン・メノナイト大学やゴージェン大学があるが、いずれも北星学園大学と国際交流の実績がある大学である。また、現在発展の著しいアジアの隣国との交流は、将来に向かって地域的な平和の種をまく上で非常に重要なものである。今後は、これらのネットワークを生かし、平和学の領域でさらに連携して、北星学園大学が、その経験と地の利を生かして、世界でもユニークな平和学を学ぶ拠点として、その礎を築いていく必要があると考える。

結びにかえて—大学と平和学教育再考

現在、教育のグローバル化が必須の課題として、特に高等教育機関である大学につきつけられている。これは、大学が、グローバル化する世界に何を貢献できるかという問いでもある。そして、平和は、グローバル化する世界の中で追求されるべき価値の中でも、もっとも優先順位の高いものである。

北星学園大学がその持てる教育的資源を生かして、この課題にどう貢献できるかが問われているのである。

北星学園大学の場合、その建学の理念に平和へのコミットメントが銘記され、すでに20年近くにわたる平和教育活動の経験を持つ。

今後はさらに、平和学科目を中心としつつ、全学的に繰り広げられているさまざまな実習との連携を図り、さらに前述したように大学の大きな特徴である国際教育交流を平和学教育の中に生かすことによって、平和学プログラムをさらに高度化することが可能である。

具体的には、平和学関連科目を中心とした平和学副専攻の創設や、平和学教育にかかわる教員・スタッフの研究会、そして学生や地域の市民がより気軽に安価できるような定期的な学習会の開催等も考えられる。

さらに、今後北星学園大学の平和学の高度

化を考える際にとどまらず、一つの中学校、三つの高等学校を有する学園内での平和に関する協働的な取り組みを考える上で大変参考になるのが、学校法人立命館の取り組みであろう。もちろん学園や大学の規模が違うので、同じような取り組みが可能とは限らないが、前述したように、北星学園大学にはこれまでの平和に関する取り組みと、平和学に熱心に取り組み姉妹校との世界的なネットワークが強みとして存在している。その強みを、具体的な授業や企画を通して一つずつ前に進めていくことが、まさに地を足につけた取り組みとして重要となろう。

また別の視点から考えると学園内にとどまらず、地域に開かれた大学づくり(学園づくり)の一環としても重要な視点を与えてくれる。既に平和学をテーマとした公開講座を開催しているが、今後はこれまでの経験を基盤として、例えば高校生に夏休みを利用して「平和学セミナー(仮称)」を開催して、大学の知を還元する取り組みをするというアイデアもあって良いと考えている。

平和学について考えることは、そのことが地域社会や国家ならびに国際社会の諸課題と結びついているがゆえに、グローバルな視点から大学の役割を再検討することにも繋がり、まさに最近よく聞かれる企業の社会的責任ならぬ大学の社会的責任を果たす契機となることも、改めてここで付記しておきたい。

「本研究は、2009～2010年度北星学園大学特別研究費による成果の一部である。」

- 1 岡本三夫、横山正樹編『平和学の現在』p.7-p.8 (1999年法律文化社)
- 2 深瀬忠一「国際協力と平和の学際的研究について—大学における総合的平和研究と教育」(北星学園大学経済学部『北星論集』第34号(1997年3月) p.311-p.314)
- 3 岡本三夫『平和学を創る—構想・歴史・課

- 題一』(1993年 財団法人広島文化センター) p40, p45
- 4 片岡徹「翻訳 マンチェスター大学の平和学プログラムの歴史～過去、現在そして未来～(ケネス・ブラウン マンチェスター大学名誉教授, 元平和学研究所所長) (北星学園大学文学部)『北星論集』第48号第2号2011年)を参照。彼が講演の中で、「私たちに必要なことは、歴史修正主義を未来の修正へと転換することだと思います。私たちには、暴力の代理戦争への代替案を知っており、それらを教えることができる修正主義者と博愛主義者を必要としているのです。私たちは私たちのために働く「現実主義者」によって見落とされている現実を伝える必要があるのです。並々ならぬ犠牲を出しながらも、戦争には本当の勝者がいないという痛々しい数多くの教訓があるのです。」(pp115-116)と言っていたのが大変印象的であった。
- 5 筆者(萱野)は2010年12月17日早稲田奉仕園で行われた恵泉女学園大学大学院シンポジウム「宗教の平和学」に参加する機会を得て、そこで行われた討論から平和学研究科の自由闊達な研究活動の一端に触れることができた。記して感謝したい。
- (参考文献)
- 岡本三夫(1993)『平和学を創る—構想・歴史・課題—』財団法人広島文化センター
- 岡本三夫・横山正樹『平和学の現在』法律文化社(1999年)
- 片岡徹(2009a)「資料 Manchester College Bulletin of Peace Studies Institute (マンチェスター大学平和学研究所紀要)の紹介:米国で最初の平和学講座の歴史を知る貴重な資料として」北星学園大学文学部 北星論集第46号第2号
- 片岡徹(2009b)「平和学のパイオニア～姉妹校マンチェスター大学～」『一粒の麦 第2集 No.39』北星学園大学・北星学園大学短期大学部スミス・ミッションセンター
- 片岡徹(2011a)「翻訳 マンチェスター大学の平和学プログラムの歴史～過去、現在そして未来～(ケネス・ブラウン マンチェスター大学名誉教授, 元平和学研究所所長)北星学園大学文学部 北星論集第48号第2号
- 片岡徹(2011b)「追悼 ケネス・ブラウン先生(マンチェスター大学名誉教授・元平和学研究所所長)『一粒の麦 第2集 No.43』北星学園大学・北星学園大学短期大学部スミス・ミッションセンター
- 恵泉女学園大学キャンパスガイド2011
- 恵泉女学園大学学生生活ハンドブック2011
- 北星学園・戦後50周年を考える平和のつどい実行委員会編(1996)『時のしるし 北星学園・戦後50年を考える平和のつどい』学校法人北星学園
- 北星学園・1996年度平和教育専門委員会編(1997)『時のしるし 第二号 北星学園・平和へのメッセージ』学校法人北星学園
- 北星学園・学園学校会議編(1998)『時のしるし 第三号 北星学園・110年を刻む』学校法人北星学園
- 北星学園・学園学校会議編(1999)『時のしるし 第四号 木はその実によって知られる』学校法人北星学園
- 北星学園平和教育専門委員会編(2000)『時のしるし 第五号 平和教育, この一年』学校法人北星学園
- マンチェスター大学平和学プログラム HP:
http://www.manchester.edu/academics/departments/Peace_Studies/index.shtml
(最終アクセス日 2011年10月24日)
- 立命館大学国際平和ミュージアム HP:
<http://www.ritsumei.ac.jp/mng/er/wp-museum/>
(最終アクセス日 2011年10月24日)